ヒマラヤ登山隊

西北ネパール横断

福田勝一

ララ湖からの眺め

紅葉した山々にそろそろ新雪が舞い降りようとしている十一月の半ば、われわれはネパールで最も美しく最も大きい湖の畔に幕営した。肌にしみるような晩秋の冷たい風にゆらゆらとそよいでいる葦のかたわらに、真黒で首だけが赤い鴨が数十羽群をなして泳いでいた。その向う側には白雪を抱いたヒマラヤが天高くそびえている。それはシスネヒマールとパトラシヒマールの山群であろう。訪れる人とてほとんどないこの山間の湖は、その神秘性とあいまって、いつの頃からかララ湖と呼ばれている。この湖は周囲二十キロメートル、標高三千メートルの堂々たる大湖である。

タラ村のチョルテン

十一月十三日にカテリー川のラムタリ村で、ジュムラに向う本隊と分れたわれわれは、カテリー川を遡ること二日間で、このララ湖に到着した。われわれはこれからポカラまで約五十日間の予定で、日本人としてはじめての西北ネパール横断を行おうというのである。メンバーは私と松村君、それに料理の上手なシェルパのラクパツェリンと三人のクーリー（人夫）である。美しいスイスの風景もこれにはおよぶまいと思われる素晴らしい眺めに、先を急ぐわれわれの足もつい引きとめられて、半日を湖岸で過してしまった。われわれのコックは近くのチャープル村で仕入れたニワトリを三匹しめて、豪勢なローストチキンを作るのにてんてこ舞いで、いつもクークーと文句ばかりいっているわれわれの胃袋も、今日だけは御満足のことであろう。

附近の住民は裸足で、衣類は黒く、肌の色はさらに黒い。部落には牛糞がたくさん散らばり、非常に多くのハエがたかり、その不潔なことはララ湖の美しさとあまりにも対照的であった。この湖にはたくさんの魚が棲んでいるということであるが、冬期は湖底にあって冬眠し、モンスーン期に上ってくるので、その時期になると村人は原始的な網で魚をと

らえるのだそうである。目の前にこれだけ素晴らしい湖をもちながら、ここの住民は何の恩恵にも浴していないように見受けられた。ただ、この附近に棲むカモシカなどの動物だけが水を飲みにくるくらいのものである。

マラ王朝の末裔

翌日、湖の下にあるゴマ村のマラ王朝の末裔を訪ねてみた。ネパールもインドもそうであるが、田舎に行くと家に便所がなく、みな野糞である。それも家の周囲や村のはずれで用をたすので、どこの村でも、その入口附近には多くの人糞を見かける。よく気をつけてないとうっかりこれを踏んづけてしまう。私はゴマ村の近くであれだけ気をつけていたのにとうとう人糞を踏んづけてしまった。よく見ると周囲は人糞の山でよけて通ることもできず、あきらめてその上を歩くことにした。ジンマール・ミン・バハドゥル・マラ・タクリーの家はすぐにわかった。石を積み重ねて作った三階建ての白壁の家で、この村でいちばん大きな建物である。この家の二階のベランダに七十才位の眼鏡をかけた老人が立っており、彼がこの家の主で、マラ王朝の末裔であった。卵焼と紅茶の歓待を受けながら、私はマラ家について種々のことを聞きだそうとしたが、彼は多くを語ろうとしなかった。その昔、ネパールとチベットの一部にまでその支配権をおよぼしていた一国の王も、現在では、約百ヵ村四千人の百姓を支配する土候になり下っていた。彼は三人の妻と十二人の子供を持ち、老いてますます盛んなようであった。ネパール政府のお墨付きを見せると心よく米とアタ（小麦粉）を準備してくれた。われわれの行く手にそびえる高い峠は、もはや相当の雪におおわれていて越すことは不可能であるから引返しなさい、という親切なマラ候の忠告に感謝しながらわれわれはムグへの道を急いでいった。道すがら冬を低地で過すために下ってくるチベット人の幾組かとすれ違った。ムグカルナリ川の流域には、チベットから逃げてきた多くの避難民が幕営しており、かれらは今もってダライラマを信仰し、中共の統治下に住めない人々である。いつの日かダライラマがふたたびチベットに帰るであろうことを信じ、その時に共にチベットに帰るのだと語るかれらの顔には、憂愁がただよっていた。

ツァンバとチャパティ

はかどらないクーリーの足をせきたてながら十一月十九日の夕暮迫る頃、ネパールとチベットの国境の町ムグに着いた。町の入口にはチベット特有のチョルテン（仏舎利塔）がそびえ、家々にはタルチョー（経文と仏像の描かれたのぼり）がたなびいている。あこがれていたチベットの町にとうとうやって来たのである。今まで見てきたネパール人の村落と様相ががらりと変り、何となく威圧的である。標高三千四百メートルのこの町は非常に寒く、人々は羊の毛皮や織物を身にまとい、チベッタンシューズ（カンジェという）をはいている。われわれは真先にチェックポストを訪れることにした。この附近は中印国境紛争の激化にともない、いよいよ重要な拠点となり、国境警備隊としての役割も果しているのである。ここの長であるインド人は非常に親切にわれわれをもてなしてくれ、着いた夜われわれを晩餐に招待してくれたが、その料理はチリー（唐辛子）が良くきいていて非常に辛く、水なしには食べることができなかった。献立てはライスとチャパティ（小麦粉を

ねってせんべい状に伸ばし、それを鉄板で焼いたもの）に羊肉のカレーそれにポテトとカリフラワーの野菜煮で、この地域では最高のものであった。住民の生活は貧しく、高冷地のために農耕ができないので、羊毛の織物やチベット産の岩塩を下の部落に運び、食糧と交換する物々交換経済でその生計を維持しているである。チェックポストの役人の好意的な態度に引きかえ、住民の態度は冷たかった。生れてはじめて見る外国人に対して、その態度は排他的で、しかも町全体が、封鎖的であった。この町で最も敬意を表されているのはラマ僧で、かれらは赤い衣服をまとい、チベッタンシューズをはき、体格も良く、とくに眼光はするどい。貧しいこの町にあってラマ僧へのお供物は豊富で、次から次に米、アタ（小麦粉）、ツアンバ（麦こがし）等が運ばれていた。

われわれはムグからムグ川に沿ってしばらく引返し、ドルポ地域のダルフ村に入り込んだ。ここは農耕牧畜が盛んで食糧の豊富な村である。この村のラマ僧はそのほとんどが妻帯しており、農耕に従事している。われわれはここのラマ僧から食糧を分けて貰った。チベット人の主食はツァンバであり、これにバター茶（お茶にバターを入れて塩で味付けしたもの）を入れて、こねながら食べるのである。他にマッカイ（トウモロコシ）やアタ、パーパ（そば）、コード（粟）等を使用している。副食としては羊やヤク（高所に棲む牛）の肉とじゃがいもをギー（バター）でいため、カレーと塩、チリー（唐辛子）等で味付けして食べている。チベット人が最も大切にしているものはヤク、ヤギ、羊等の家畜で、これらは衣料、食用だけでなく輸送機関として最も大事なものになっている。

ピジョルガオンへの道

ダルフ村からピジョルガオンまでの一週間は悪絶無双のラングー川に悩まされ、この横断旅行中最も危険なところであった。途中には一軒の家もなく、わずかに猟師の通う踏み跡があるだけで、それもいたる所で寸断され、危険極りないものであった。滑りやすいざらざらした急斜面のトラヴァース、目もくらむような高巻き、岩登りにつぐ岩登りと全く寿命の縮まる思いであった。途中四千八百メートルの峠越えで吹雪にあい、ガイドに雇ったチベット人との間にトラブルが起り、これ以上進むならわれわれを殺す、といきまくのをなだめたり、すかしたりしてキャラバンを続けたのである。ぼろぼろの衣服をまとい、なんらの防寒具も持たない彼らにとって雪は死を意味したに違いない。

ラングー川の苦労の末、十一月三十日無事にピジョルガオンへ着いた時はわれながらほっとした。

標高三千九百メートルのこの村の住民は冬期を低地で過すのが通例らしく、約半数が残っているだけで、村の中はひっそりとしていた。この附近は薪が少ないので、ヤクの糞を燃料に使っている。よく乾燥したヤクの糞は非常によく燃えるが、きつい悪臭を発するのが欠点である。酒好きの松村君とラクパツェリンの提案で、ヤクの干肉を肴に地酒のチャンでいっぱいやることにする。高度の関係もあってか、少しの酒でよくまわり、良い気分になってしまった。一九五八年に訪れた日本隊（川喜田隊長の率いる西北ネパール学術調査隊）のことを覚えているのか、なつかしそうにわれわれに話しかけてくる者もいた。かれらは普通腰に小刀をぶら下げているが、抜

いて見せてくれた中身はさびついて使えるシロ物ではなかった。最近では、ただの飾りになっているようである。

ピジョルガオンから先の道は、高度も上がり四千五百メートルから四千八百メートルの高原が続くので、羊を雇うことにした。羊は普通八キロから十キロの荷物を運び、相当悪い道でも歩くので非常に重宝がられている。

一路文明へ

十二月一日、われわれの羊のキャラバンはピジョルガオンを後にして、今横断中最高のシェー峠目指して進んでいった。高所のせいか息切れが烈しく、ともすると休みがちになる。来た道を振り返ると、北方のチベットとの国境稜線にクビカンリーヒマールがくっきりとそびえ、さらにその向うのチベット高原は薄紫色のヴェールにつつまれていた。

十二月三日、雲一つない晴天に恵まれて、われわれは五千三百メートルのシェー峠に立つ。峠からの眺望は素晴らしく西の方にはカンジロバヒマールが真近に控え、反対側の東の方には遠くドーラギリヒマールがそびえている。腰までもぐる雪の急斜面を一気に下ると、その下の方に紺碧色の美しいポクサンド湖が静かに冬の日ざしを浴びていた。水面には十数羽の水鳥がそれぞれ思い思いに心地よげに泳いでいる。ここにもまた一つ素晴らしい楽園があったのである。

ポクサンド湖の南端にあるツォバ村を最後にチベット人の住む村は終り、ここから南の方にはネパールのマガール族の村落が続いている。砂まじりのチャパティに少々いや気のさしてきたわれわれは、五合二百円という法外な値段の米を買ったが、この高価な米にもやはり小石がたくさん入っていたのにはげっそりしてしまった。

マガール族の町タラコットまで下りてくると、今まであるいてきた高地の寒さが嘘のような暑さで、汗をふきふきあるかねばならなかった。かと思うと体がちぢみあがるような腰までの渡渉を幾度も強いられたり、全くネパールの旅は楽ではない。

腰までもぐるラッセルにあえぎながら四千百メートルの峠を越して、十二月十五日、ドルパタンに着いた時は、われわれの空腹もその極に達していた。食糧が得られず、この四日間というものは毎日トウモロコシのおかゆであった。ドルパタンは、スイス赤十字社の人々がチベットの避難民を保護するために作った村で、ウッタール川の広大な草原に展開している。ここには約二百五十人のチベット人が住み、それぞれ家と耕地を与えられ、スイス人から農業技術の指導を受け、チーズなども作っている。

ウッタール川の源流から眺めたドーラギリヒマールの姿は、われわれの今までの苦労を一度に吹き飛ばしてくれるほどみごとなものであった。ここからさらに一週間のキャラバンを続けて、十二月二十三日に横断の終着駅ポカラにたどりついた。そこにはアンナプルナヒマールの麗姿と文明の利器飛行機がわれわれを待ち受けていた。かくしてサイパルのベースキャンプをでていらい歩くこと五十五日間、約七百キロメートルにおよぶ西北ネパールの横断は終ったのである。

最後に今回の遠征に際し種々御支援下さった校友の皆様に心から御礼を申し上げ、私の報告を終ることにする。

（昭三五大経卒・サイパル登山隊員）